

日本消化器外科学会雑誌編集後記

日本消化器外科学会雑誌第 47 巻第 8 号をお届けします。福島県郡山市での総会が終わり、暑い盛りです。会員の皆様にはくれぐれもご健康に留意され、お疲れが出ませんように。

震災から立ち直られ、立派な学会を開催された後藤満一教授には本当に頭が下がります。NCD のデータを用いて、日本の外科診療を客観的に評価することが少しずつ可能になってきているのを肌で感じました。

私は、所属施設の臨床研修プログラム責任者を拝命しており、現在来年度採用研修医、つまり医学部 6 回生の面接試験を終えたところです。本年は外科志望の学生が多く、心強く感じました。といっても彼らすべてを当院で採用できるわけではなく、また、彼らが本当に当院を第一志望としているのかはわかるすべもありません。マッチング制度の歯がゆさを感じています。昔の医局による人事コントロールと、現在の研修制度の両者の利点を併せ持つような制度が望ましいところです。

さて、本年 4 月から時間外緊急手術の加算が大幅に増加し、医師に対する手当も義務づけられ、いわゆる「医療従事者負担軽減」システムが動き始めました。私も含めて、昭和の外科医は、手術をすることに忙殺され、自身の労働への正当な評価体制や、待遇改善への努力をしてこなかったわけですが、ようやく社会が動き始めたのではないのでしょうか。学会としても、未来の外科医のために、手術の正当な評価システムを構築していくべきだと思います。

昨今世間を賑わせている話題で、本誌の査読をしても感じることのひとつに、いわゆる「コピペ」問題があります。特に症例報告で、過去の論文の考察をそのまま転載している例が見受けられます。もちろん、引用していることを明らかにすればよいのですが、あたかも自身が考察したかのような書き方をしているのは問題です。指導医の先生方には、そのような論文執筆のマナーをぜひご指導いただきたいです。過去に論文を記述した人の労苦に対して敬意を払い、自分も誠実に精一杯の努力をすることが大切です。若いときに「コピペ」論文が採用されてしまうと、その後も世間を甘く見てしまうのは、例の事件からも明らかです。若い外科医の将来のためにも、「コピペ」論文を発見し不採用にする「うるさいオヤジ」に徹しておりますので、ご了承ください。

最後に、本誌は邦文誌の最高峰を維持するという編集委員会のモットーに従い、私もしっかりと勉強して査読をしてまいります。会員諸兄の積極的な投稿をお待ちしております。

(村田 幸平)

2014 年 8 月 1 日